第15回　日本在宅医学会大会　プログラム別　詳細情報

カテゴリー	ランチョンセミナー
共　　催	医療法人ゆうの森
タイトル	北海道における循環型地域医療支援システム ～医療過疎地域における人材確保のために～
日　　時	平成 25 年 3 月 30 日　12：10～13：10
会　　場	第 6 会議室
演　　者	医療法人北海道家庭医療学センター　理事長・草場　鉄周先生
座　　長	医療法人ゆうの森　たんぽぽクリニック　濱崎　圭三先生
企画趣旨	2000 年代に日本全国を席巻した医療崩壊と総称される現象の中で、都市部と郡部の医療格差の問題に焦点が当てられてきた。都市部では医療ツーリズムが語られる一方で、へき地では医療過疎のために急病の際の救急対応や周産期医療に対する不安が高まって人口も流出しているというアンバランスに違和感を覚えた方も少なくないだろう。しかし、国や自治体、更に大学医学部は医局制度の弱体化のあおりを受けて医師の配置を促す手段をほとんど持ち合わせておらず、せいぜい金銭的なインセンティブや田舎暮らしの魅力などに訴えかけるほかなく、根本的な対応はほとんどなされず今に至っているといっても過言ではない。 北海道家庭医療学センターは 1996 年に家庭医療の実践、家庭医の教育を目的に設立され、1999 年より本格的な家庭医療研修を開始し、現在まで約 40 名の家庭医療専門医を輩出してきた組織である。家庭医療の実践においては中規模都市・室蘭からスタートしたが、都市部よりも健康問題の幅が広く地域全体を見渡しやすいフィールドとして郡部の診療現場も必要な状況であった。 そうした中、縁があって 2001 年より十勝・更別村から家庭医派遣の依頼があり、更別村国保診療所への医師の派遣と診療展開がスタートした。当初は若手医師中心の診療での苦戦も予想されたが、村民から次第に支持を得て受診者数は増加し、村外に流出していた患者が村内に戻り経営指標も改善していった。その中では、村民の健康問題を包括的に扱う家庭医療の診療スタイルが村民のニーズに合致した点が大きく影響した。 その後、2005 年の寿都町、2009 年の上川町と自治体との業務提携も広がりを見せ、各診療所には所長が１名、副所長が１名、研修医が１～２名という３～４名の医師配置を継続することができ、いわゆるへき地であってもいきいきと若手医師が活躍し学ぶ場を形作ることは可能であると実証してきた。こうした、同一法人の中で都市部と郡部の診療所を展開しつつ、研修医として学びながら循環するシステムを「循環型地域医療支援システム」と呼んでおり、都市部と郡部の対立ではなく連携を実現するシステムとして提唱したい。